

令和6年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育ステージ	早期：黄熟期～成熟期（コシヒカリ） 早植：出穂期～乳熟期 普通期：幼穂形成期～穂ばらみ期
生育概況	早期：「コシヒカリ」の出穂期は平年より4日程度早まった。出穂後の高温の影響による白未熟粒や胴割粒の発生が懸念される。 早植：出穂期は平年並～5日程度早まり、中山間地では早い傾向である。高温による葉色の低下や下葉の枯れ、赤枯れ症が散見される。 普通期：出穂期は平年並～やや早まる見込み。麦跡ほ場ではガス湧きや赤枯れ症が目立ち、熱風による葉先の枯れが散見される。

1 気象経過（前橋地方気象台の気象データ、8月は第3半旬までのデータ、参考資料参照）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+3.2℃	+0.9℃	+1.4℃	+2.6℃	+2.5℃	—	—
降水量(平年比)	98%	106%	114%	74%	52%	—	—
日照時間(平年比)	87%	109%	139%	116%	144%		

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培（6月15日以前の田植）

早期栽培「コシヒカリ」の生育ステージは、黄熟期～成熟期となっている。6月中旬以降の高温・多照の影響で生育が進み、出穂期は平年より4日程度早まった。作柄は並が予想されるが、出穂期以降20日間の平均気温が27℃以上で経過しているため、高温による白未熟粒、胴割粒の発生による外観品質の低下が懸念される。

早植栽培「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の生育ステージは、出穂期～乳熟期となっている。高温・多照傾向で経過し生育は概ね順調だが、葉色の低下や下葉の枯れ、赤枯れ症が散見される。出穂期は地域や品種により差があるが、平年並から5日程度早まった。

イ 普通期栽培（6月16日以降の田植）

普通期栽培「あさひの夢」の生育ステージは幼穂形成期～穂ばらみ期となっている。移植後、高温の影響により発生した除草剤の薬害や、麦跡ほ場でのガス湧きや赤枯れ症が目立っている。また、台風通過後のフェーン現象による熱風により、葉先の枯れが散見されている。出穂期は概ね平年並からやや早まることが見込まれる。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

病害虫は、紋枯病、ばか苗病、斑点米カメムシ類が全体でやや多く見られ、イネカメムシは県東部地区の出穂が早い地区で見られている。バッタ類（クサキリ、ササキリやイナゴ等）は県東部地区にやや多く見られる。中山間地では7月下旬から8月上旬頃にいもち病が見られたが、全体の発生量は少ない。

(3) 作況等の調査結果

ア 作況等の調査結果（表1参照）

県平均の移植後40日の草丈は62cm（過去平均比105%）、茎数は461本/m²（同100%）であった。出穂期は8月4日（同-3日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6月23日移植）

「あさひの夢」の移植後40日の草丈は73cm（過去10か年平均比99%）、茎数は453本/m²（同101%）であった。幼穂形成始期は8月6日（同+1日）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6月4日移植）

「あさひの夢」の移植後40日の草丈は77cm（過去10ヶ年平均比117%）、茎数は501本/m²（同81%）であった。

表1 水稻作況等調査結果（地域別・作期別）（ ）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月日	移植後20日調査		移植後40日調査		出穂期	
		草丈 cm	茎数 本/m ²	草丈 cm	茎数 本/m ²	カ所数	月日
県	6/6(0)	32(103)	185(103)	62(105)	461(100)	8/15	8/4(-3)
中 部	6/15(0)	33(104)	204(104)	70(111)	471(110)	2/4	8/9(-4)
西 部	6/11(0)	34(108)	180(109)	67(104)	462(106)	2/4	8/3(-2)
北 部	5/22(+1)	28(99)	170(93)	45(98)	467(89)	4/4	8/3(-2)
東 部	6/16(-3)	32(93)	193(119)	77(109)	394(94)	0/3	—
早期・早植	5/28(0)	29(103)	202(103)	58(108)	464(95)	8/10	8/4(-3)
普通 期	6/21(-1)	35(102)	159(110)	69(102)	456(111)	0/5	—

注1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。

2) 移植期欄の()内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。

3) 8月15日現在で調査時期となったほ場のみの値で、カ所数欄は[調査カ所/設置カ所数]を示す。

4) 早期・早植：6月15日以前の田植。普通期：6月16日以降の田植。

5) 桐生市は担当農家変更のため、県、地区、作型平均から除外した。

6) 館林市は移植時期が大幅に遅れたため、県、地区、作型平均から除外した。

(4) 作柄のまとめ（表2）

各地域の作柄は、すべて「並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況（ ）内は農畜産課・地区農業指導センター

地域別	作柄	概 況
中 部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	並	・早植栽培：出穂期～乳熟期。高温の影響により下葉の黄化、赤枯れ症が見られる。出穂期は平年より3～5日程度早まった。移植後はイネミズゾウムシが散見された（渋川）。 ・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。移植後の高温のため除草剤の葉害、ガス害による生育の遅れや生育不良が発生した。特に麦跡ほ場では被害が顕著である。台風通過後のフェーン現象による熱風により葉先の枯れが散見される（伊勢崎）。

西 部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	・早植栽培：出穂期～乳熟期。出穂期は平年並から4日程度早まった。苗の灌水不足による生育の停滞が散見され、日照時間が少な目でやや徒長気味（西部）。 ・普通期栽培：分けつ後期～穂ばらみ期。出穂期は平年並からやや早まる見込み。生育は概ね順調だが、麦跡圃場では強還元によるガスの発生・生育不良が散見される。また、強風による葉の損傷も散見される。出芽期の高温により籾枯細菌病が見られた（西部）。
北 部 (吾妻) (利根沼田)	並	・早植栽培：出穂期～乳熟期。出穂期は平年より3～7日程度早まった。一部高冷地では平年並み（利根沼田）。7月下旬から8月上旬頃にいもち病が見られたが、全体の発生量は少ない。斑点米カメムシ（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ）が局所的に発生している（吾妻）。
東 部 (東部) (桐生) (館林)	並	・早期栽培：黄熟期～成熟期。コシヒカリの出穂期は平年より4日程度早まった。出穂後の高温による白未熟粒、胴割粒等の発生が懸念される。 ・早植栽培：減数分裂期～乳熟期。出穂期は平年並から3日程度早まった。高温により生育は大幅に前進している（東部）。中山間地域の一部では生育は大幅に前進している（桐生）。紋枯病が散見される（東部、桐生）。 ・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。出穂期は平年並からやや早まる見込み。高温の影響等により赤枯れ症状が見られるが、生育は平年並に進んでいる。斑点米カメムシ類が平年より多く、不稔による減収、斑点米の発生が懸念される（館林）。

3 技術対策

(1) 共通

- ア 気象庁発表による長期予報では、向こう1か月の気温も高温となることが予想されている。高温による品質への影響が懸念されることから、以下のとおり適正な水管理や適期収穫等の基本技術を徹底し、被害の軽減を図る。
- イ 生育の前進を見据え、計画的な作業とその準備に努め、荷受け施設においては水稻の生育に応じた稼働計画を設定する。
- ウ 農薬散布については生育ステージに応じた適期散布と適正使用を心がけ、使用履歴の記帳を徹底する。
- エ 斑点米カメムシ類を本田に寄せ付けないために、出穂期の前後各3週間程度はイネ科一年生雑草を継続して出穂させない畦畔管理を行う。そのため、出穂期の2～3週間前と出穂期頃（イネ科雑草発生前）に除草を行う。ただし、やむを得ず1回しか行えない場合は従来と同様に出土2週間前までに除草作業を行い、以降は作業を控える。本田で薬剤（液剤）による防除を行う場合は、穂揃期とその1週間～10日後に2回行う。
- オ いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病が発生したほ場の籾は翌年の種もみとして利用しない。

(2) 早期・早植栽培

- ア 乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、高温が予想される場合は飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。
- イ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。
- ウ 出穂後30日以降を目安に落水し、その後は必要に応じて走水を与える。

エ 高温日が連続すると登熟期間が短縮しやすいことに留意する。また、白未熟粒や胴割粒の発生が懸念されることから、成熟状況を確認して適期収穫を徹底する。

オ 急速乾燥や過乾燥は胴割粒の発生を助長するため、乾燥作業には十分留意し、毎時乾減率は0.8%以下で乾燥を行う。

(3) 普通期栽培

ア 穂ばらみ期～出穂開花期は湛水、乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、出穂後に高温となる場合は、飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。

イ 葉色が低下しているほ場では、穂肥により高温障害（白未熟粒・胴割米）の軽減を図る。

ウ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。

エ 病虫害の発生状況、発生予察情報を踏まえ、効果的防除を心がける。

オ いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病が発生したほ場の粃は翌年の種もみとして利用しない。

《参考資料》

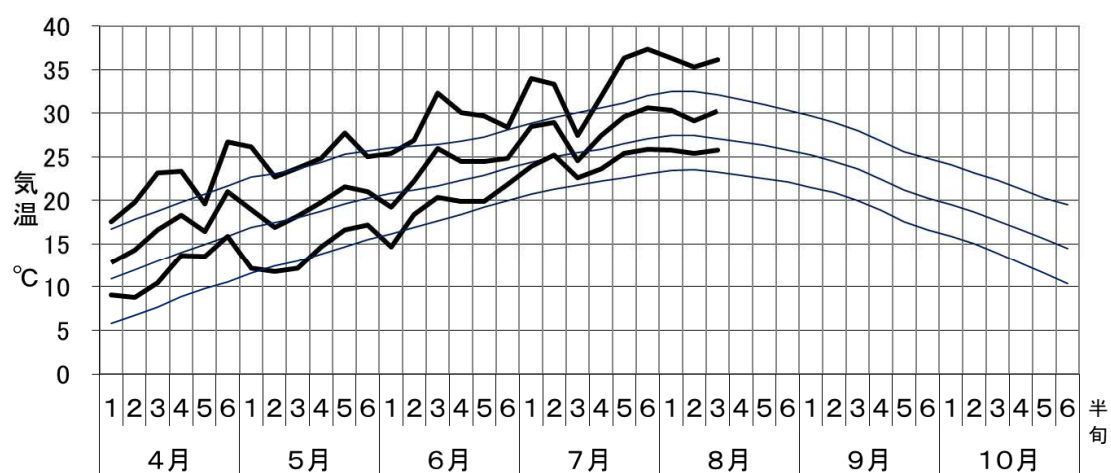


図1 気温

— 本年 — 平年

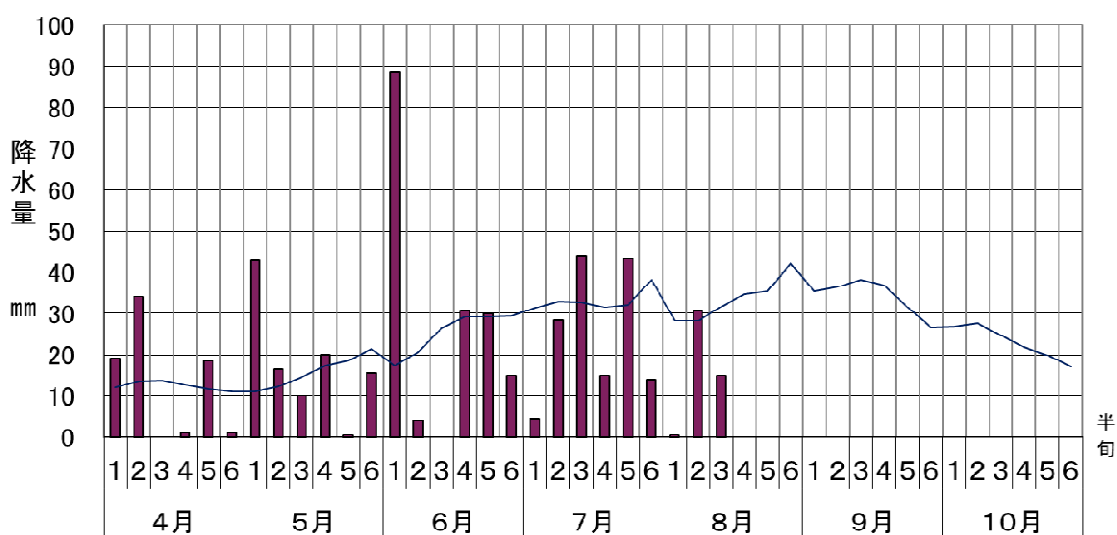


図2 降水量

■ 本年 — 平年

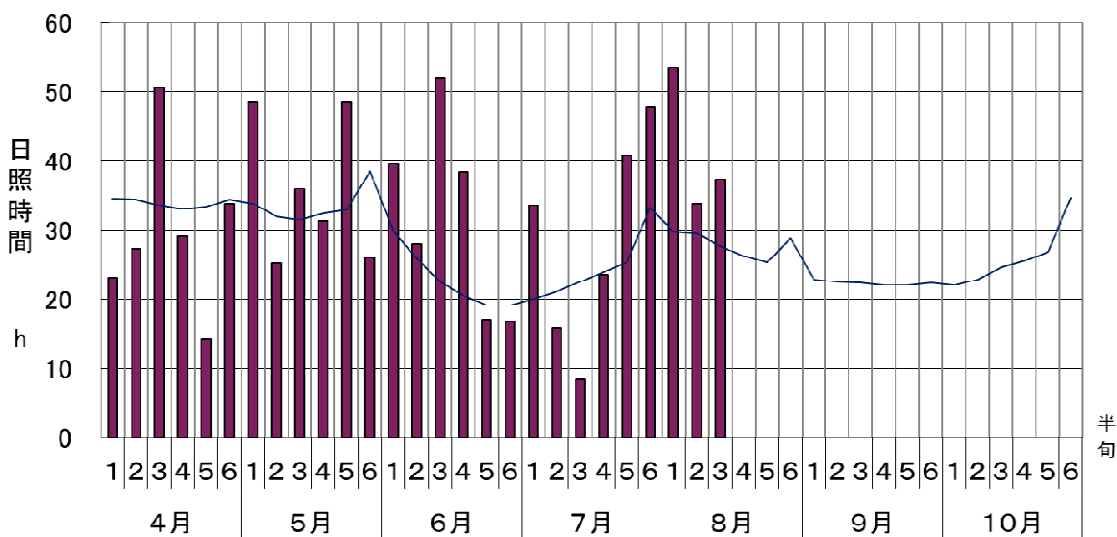


図3 日照時間

■ 本年 — 平年